

1 ベと病【病原体：*Pseudoperonospora*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 葉に発生する。葉脈に区切られた多角形の病斑を生じ、多湿時には病斑の裏にすす状のカビを生じる。
- 2 降雨が多く多湿条件下になると多発しやすくなる。
- 3 肥料切れや草勢の衰えた状態のとき多発する傾向がある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 排水と換気を良くし、過湿を防止する。
- 2 プラスチックフィルム等でマルチを行い、地表からの水滴のはね返りを防止するとともに、施設内の湿度を低くする。
- 3 肥料切れしないように管理する。
- 4 老化葉や発病葉は除去し、通風採光を良くする。

C 薬剤防除のポイント

- 1 多発後の防除は困難なので、薬剤散布は予防及び発生初期に重点をおく。
- 2 気象条件の悪化時には時期を失ないように薬剤を散布する。
- 3 薬剤耐性菌発生のおそれがあるので、同一系統剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

2 疫病【病原体：Phytophthora属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 茎葉、果実などに発病する。果実では暗緑色から黄緑色の斑点を生じて腐敗する。本病は短期間に急激にまん延する。
- 2 遊走子が水の中を遊泳して拡散するため、かん水によりまん延する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 床土は無病土を使用する。
- 2 カボチャ台に接ぎ木する。ただし、灰色疫病はカボチャ台木を侵す。
- 3 かん水には地下水を用い、病原菌の汚染の心配のある河川水やため水を使わない。
- 4 発病株は抜き取って処分し、ほ場の周辺に放置しない。

C 薬剤防除のポイント

発生してからの防除は手遅れになりやすいので、薬剤散布は予防に重点をおく。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

3 炭疽病【病原体：Colletotrichum属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 主に露地栽培で発生する。葉では輪紋のある褐色の病斑が生じ、中心部は灰褐色となって破れやすい。茎の病斑は、灰白色で中心部がくびれる。多湿が続くと病斑上に黒色粒状の分生子層または鮭肉色の分生子塊を生じる。
- 2 病原菌は雨水の飛沫とともに飛散する。排水不良や通風の悪いほ場は発生を助長する。また、窒素質肥料の多用も発生を助長する。
- 3 被害植物の組織中の菌糸や支柱等の資材に付着した胞子が翌年の伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発生地での連作を避ける。
- 2 排水を良くし、窒素質肥料の多用を避ける。
- 3 敷きわらやプラスチックフィルムでマルチを行い、地表面からの病原菌のはね返りを防止する。
- 4 被害果、被害葉、支柱の巻きひげ等は取り除き処分する。

C 薬剤防除のポイント

発生してからの防除は手遅れになりやすいので、薬剤散布は予防に重点をおく。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

4 うどんこ病【病原体：Podosphaera属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 葉の表裏に白色から灰色のカビを多数生じる。子のう殻の形成は見られない。
- 2 一般に生育後期に発生が多いが、過繁茂で通風採光の悪い場合に発生しやすい。また、多肥状態で多発する傾向がある。
- 3 一般に発生が早いほど被害も多くなる。中下位葉の葉裏から発生し始めるので、葉裏をよく観察する。
- 4 分生子は風によって拡散し、水がなくても発芽する。り病部の分生子が越冬して、翌年の伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 密植を避け、通風採光を良くする。
- 2 窒素質肥料の多用や偏った使用を避ける。
- 3 老化葉や発病葉は除去する。

C 薬剤防除のポイント

- 1 初発を見たら速やかに薬剤防除を行う。
- 2 同一系統薬剤の連用を避け、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

5 斑点病【病原体：Cercospora属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 主として葉に発生する。初め淡黄色の小病斑を生じ、次第に拡大して褐色に変わり、円形か多角形の病斑になる。病斑の中央部は灰色になり、黒色粒点を生じる。
- 2 露地栽培に発生が多い。分生子が風雨によって飛散するため、特に多雨時に発生する。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 施設栽培では多湿にならないよう換気に努める。
- 2 適正な肥培管理を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

6 つる枯病【病原体：*Didymella*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 梅雨期や秋季に雨が多いと多発する傾向がある。地際が多湿になると茎の地際部での発生が多くなる。
- 2 草勢の衰えたときに病勢が進展する。
- 3 病原菌は、被害植物中や資材等に付いて越冬し、翌年の伝染源となる。また、種子伝染もする。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 種子伝染するので、健全種子を用いる。
- 2 施設栽培では換気を良くし、できるだけ過湿を避ける。
- 3 肥培管理に注意し、樹勢の維持を図る。樹勢に合わせて摘果し、着果負担を軽減させる。
- 4 被害果や被害葉は速やかに除去する。
- 5 収穫後、発病株や資材についた巻きひげ等も除去する。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

7 つる割病【病原体：*Fusarium*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 病原菌が根から侵入し、根や茎の道管を侵す。り病すると株全体が萎れる。
- 2 窒素質肥料を多用すると被害が増大する。また、植え傷みやセンチュウの加害、乾湿の差が激しいかん水等による根傷みは感染を助長する。
- 3 本病原菌は土壌伝染及び種子伝染する。土壌中では耐久力の高い厚膜胞子の形で長期間生存する。

株全体の萎れ症状



発病株に見られる葉脈黄化症状



B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 夏期に太陽熱土壌消毒を行い、ほ場内の菌密度を下げる。
- 2 カボチャ台木に接ぎ木する。
- 3 ほ場の排水を良くし、湿害による根傷みを起こさないようにする。
- 4 施肥量の過多、特に窒素質肥料の多用を避ける。
- 5 被害株は早急に除去する。収穫後は、残さを処分する。



農業検索

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

8 ウイルス病【病原体：下記のとおり（ウイルス）】

A 発生生態

モザイク病は、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）等によって引き起こされる。これらは、アブラムシにより伝搬される。また、感染株から汁液伝染するが、土壌や種子からは伝染しない。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 アブラムシ類の飛来防止のため、防虫ネット被覆下で育苗し、本ぽでは、プラスチックシルバーフィルム等によるマルチまたはシルバーテープを利用する。施設の開口部は防虫ネットを張る。
- 2 育苗期や栽培初期の発病株は速やかに除去し、植え替える。
- 3 発病株に触れた手や器具で芽かきや整枝等をしない。触れた手は石けんでよく洗い、器具は次亜塩素酸カルシウム溶液または第三リン酸ナトリウム10%溶液に浸してから使用する。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除（ウリ類虫害の項参照）

CMV、ZYMVに対しては媒介虫（アブラムシ類）の防除を行う。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入力してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！